

ひとつのいのち

—その気付きのための理性(5)—

川崎医療短大 医用電子工学科
川崎医科大学名誉教授

中川 定明

(平成6年9月8日受理)

A Common Life of All the Living Things
—Reason for the Enlightenment of Itself— (5).

Sadaaki NAKAGAWA

Professor Emeritus, Kawasaki Medical School

Kurashiki, 701-01, Japan

(Received on September 8, 1994)

概 要

既報した、ひとつのいのち(4)では「人類の起源」と「人間の理性」について記し、「合理性」の制限と限界を述べた。著者は副題でいう「理性」のはたらきを「合理性」と峻別する。続いてひとつのいのち(5)からは、非合理の世界に入ってゆく。まず、本論文では「神性」について考えたところを述べる。その内容は、第八章：I. 天才—創造の不思議, II. 古代日本人のころ, III. 神性と魔性—むこう (ユングの「無意識」または古代仏教「唯識論」でいう「アラヤ論」) からやって来るもの。

Abstract

I want to enter into an "in-rational region" from this report "A common life of all the living things, Part 5". In this report Chapter 8, I intend to consider about a difficult problem, the "God-hood". Similar to every former reports, only short meaning of each titles included in this chapter will be stated, namely, I : a genius and a mystery of the creation, II : a minds of the ancient Japanese peoples, and III "God-hood" and "demonic spirit", those are coming from a region beyond our reason, which is similar to the "unconsciousness" of C.G. Jung, or "Araya-Shiki" in Buddhism.

第八章 神性

I. 天才—創造の不思議

神話学者キャンベル¹⁾は「シャーマン (巫女) は神話を伝え得る天才である」といった。

最近、中国古代『魏』の青竜3年(235年)と年号の入った青銅の鏡が京都・丹後地方の古墳から出土したが、それは卑弥呼(ヒミコ)に贈られたものであることがわかった。古代の鏡は化粧用ではなく、水銀を塗って太陽の光りを反射させ、人々の目を射る(天照)不思議な呪力の持ち主であることを示すための権威の象徴であったと想定される。つまり卑弥呼はシャーマンであった。中国古代の五帝、三王も呪術、たとえば『易』の力で「雨を降らす竜神」を使うという能力を備えたシャーマンであったと記されている²⁾。現在のシャーマンは芸術家であり¹⁾、したがって稀な能力を伝え得るのは芸術家である。芸術家を含めてさまざまな分野で天才は突然に出現し、その多くは「神童」といわれ、こどもの頃から異常な才能を発揮した。芸術家であるモーツァルト、ベートーヴェン、雪舟、学者であるアインシュタイン、南方熊楠その他多くの天才も神話を伝え得たといえる。

イギリスのドーキンス³⁾は生物学的な進化の担い手である「遺伝子」のほかに、文化的進化の担い手として、親の脳から子の脳へ伝えられて自己増殖する「遺伝子」を考えた。それをギリシア語の模倣 meme から採ったミームと名付け習慣、知識、知能などもミームによって遺伝すると見做した。そういう微少要素である遺伝子を想定するのは、還元主義的西欧文化の特徴であるが、その実在は証明されていない。「ひとつのいのち」第3報⁴⁾で記したように、脳内のホルモン様神経伝達物質の発見は、われわれの「自己意識」といついたものが伝播し、潜在的「意識」に動かされていることを示す。

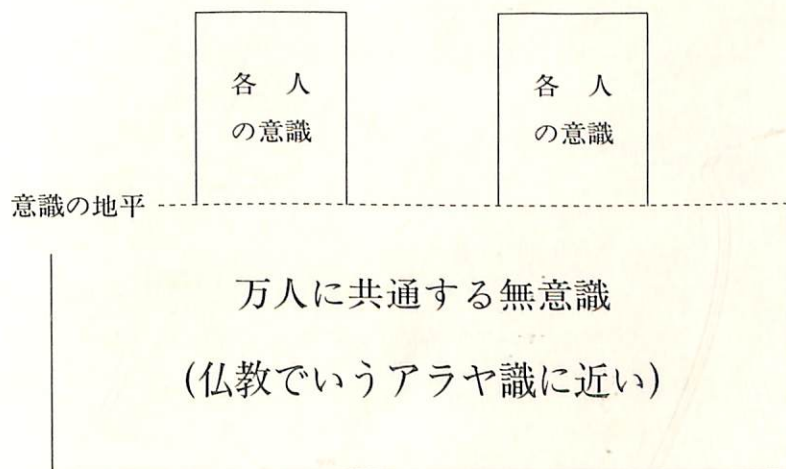
近年、「誕生の記憶」が周産期医学で問題になっている。赤ちゃんは母親のお腹のなかにいるころからお母さんの声や音楽などが聞こえていることや、母親の感情の変化が臍帯をとおして赤ちゃんに伝わるということが知られるようになった。『誕生を記憶する子どもたち』⁵⁾でD. チェンバレンは「誕生の記憶」を収集した。それを追試するため、公文教育研究会の母親モニターが107名の母親にアンケートを出したところ、45名から「誕生の記憶」のレポートが集まった⁶⁾。その1例をあげると、母：「生まれた時のこと覚えてる？」に答えて3才の男の子が、覚えているとニコリ微笑む。母：「おなかの中のことを覚えてる？」子：「こんな感じ。こんなかっこう。」(と、クルリと丸くなり母にピッタリとくっつく。)母：「おなかの中で何かきこえた？」。子：「ママの声やなにか音楽が聞こえたよ。(中略)。黒いトンネルをぐるーっと回って出てきたの。痛かった。」こういうレポートは今日、もう疑う余地がないという。D. チェンバレンが示したように近年の胎児や新生児の研究は、新生児が決して無能ではなく繊細な感受性をもつことがわかって、胎教の必要が改めて強調されるようになった。『胎児の行動研究の意味するもの』⁷⁾という日本医師会雑誌の座談会記録によれば、胎児は両親あるいはそのずっと以前の、人類が生まれるずっと前、生命が生まれたときからの遺伝子を組み入れている。つまり「生命記憶」と「記憶の伝承」というべきものがあることが語られている。また、神経系は免疫系と類似していて、利根川博士がみつけた免疫系の遺伝情報の担いでとしてのRNAの再構成が神経系でもおこなわれることがわかってきた。天才や神童の出現はこうして理解されるという。或る意味では子供は親よりも進化しているといえる。最近の子供はコンピューターを苦もなく

マスターする。

「記憶一般」についての中枢性局在はわかっていない。一般に、記憶中枢は側頭葉と海馬にあるというが、それは「意識」的な記憶のことであって、知能、技能、運動能の記憶に関与する神経細胞はそれぞれ「大脳」の支配領域、さらには「大脳辺縁系」の脳神経細胞にもあると考えられる。たとえば、或る優れたピアニストが長大な楽譜を『側頭葉』で暗記して、『頭頂葉』が支配する手指、手首、腕の動きやペダルを踏む足の動きの連動を記憶し、習練し尽くして見事な演奏をしたときを仮定しよう。それを聞いて私どもが感動させられた場合、演奏者が『前頭葉』で原曲のもつ表現を理解・解釈し、または演奏者の「大脳辺縁系」がかもしだす美しい表現に、聞くものの「大脳辺縁系」が同調するのであろう。おそらく、それらのいくつかの神経細胞集団と側頭葉や海馬の神経細胞との間に連合ができあがる時に複雑な記憶がなりたつと推測される。記憶中枢の局在は、臨床経験や動物実験で確かめられた制限的事実をいっているのであろうが、他の神経細胞との連合のネットワークが成立することを否定できない。

また、「胎児の記憶」や「記憶の伝承」が事実ならば、それらは「無意識」あるいは「潜在意識」でつくられるとも見做される。ユング⁸⁾の心理学でいう「無意識」はこういう推定のもとで理解される。「無意識」を万人が心の深奥に共有するとユングがいうのは正しいと考える(図)。私どもが夢で「落下する感じ」にハッとした経験をもつことや、「両腕を羽ばたいて屋根の上をふわふわ飛んだ経験」は多くの人に共通することであろう。これらは生物進化途上の「記憶の伝承」として理解される。

図 ユングの「無意識」



II. 古代日本人のころ

京都大学の病理学教授であった清野謙次は人類学者でもあって、アイヌは日本列島全体にわ

たって住んでいたという仮説を立てた⁹⁾。最近、京都大学の日沼頼夫⁹⁾によると、ATL ウィルスは伝染力が弱くて子供や夫婦間でしか伝染しないが、このATL ウィルスの保有者が九州、南西諸島と北海道の海岸の僻地、離島に多いことから「古モンゴロイド」の人たちの間にこのウィルスの保有者が多く、中国大陸、朝鮮半島を経て移住してきた「新モンゴロイド」人にこのウィルスの保有者がほとんどいない事実を述べた。「新モンゴロイド」が稲作農耕文化をもって日本の中央部や九州の一部に国づくりをする以前に、アイヌは、北は千島、北海道から南は沖縄にいたる間の日本列島に土着して「縄文文化」という特殊な土器をもつ狩猟採集民族として住んでいたという人類学の研究成果を出した。アイヌと沖縄人、東北地方や日本の中部山間、あるいは海岸の僻地や離島の人たちが「古モンゴロイド」であることは否定できなくなった。かつて北海道を旅行した時「カムイヌプリ」(神のいる山)、「カムイヌトウ」(神のいる湖)という名を聞いて、カムと神の類似を想った。現在の日本語とアイヌ語、沖縄語の間の語源に共通するものが多いことが研究されている⁹⁾が、カムは神の語源であろう。

そういう古代日本人はさまざまな神々をあがめた。「ユーカラ・アイヌ神謡」¹⁰⁾には狐、狼、鹿、魚その他の神様、火の神様のことがうたわれている。つまり「汎神への祈り」があった。有名な「熊祭り」は熊を射て殺し、熊の「靈魂」を神様のところへ帰す儀式であり、狩猟で得た食物すべては、神(向こう)からやってきた授かりものとして尊んで食べ、その魂をそれぞれの神様のところへ帰した。アイヌ古老によれば、存在するものすべてに「靈魂」がある。食物を拝んで食べるアイヌは、ある意味では「パン」を「聖体」とみなすキリスト教徒に似ている。また、神々の上にいる「大神」をあがめる一方で、暴風や雷の神その他の魔神のことも出ている。貧富の差別のない狩猟採集民族のアイヌ人や沖縄人は、死んだらだれもが「大神様」のところへ帰ると信じていた。「新モンゴロイド」である古代中国の民族に「神」の概念はなくて、「天」とその絶対的な位を委ねられた「天子」(皇帝)があった。「天子」のもとの意味はまた「天才」であった。『黄帝内経素問』¹¹⁾に「上古、堯、舜の曾祖父黄帝は、生まれながらにして人間業とは思えぬ聡明さで、乳飲み子の頃からものを言い、幼時にして早くも事物に対するすばやい理解力を示し、長じて天位(帝の位)についた」とある。

III. 神性と魔性

生きとし生けるものはすべては「生命記憶」をもっていると思われる。或る生物が生きた特定環境の刺激によって「生命記憶」が蓄積され、それが伝承されなければ生物の進化はないとも考えられる。ことわざにいう「一寸の虫にも五分の魂」とは本当である。仏教でいう「アラヤ識」¹²⁾という深奥の「意識」はこの「生命記憶」を洞察したものであろうし、ユング¹³⁾のいう「無意識」もおなじであろう。幼時から無類の記憶力を持ち、長じて動植物を兼ねた「粘菌」を発見した南方熊楠は、「科学の力をもってしても無限の世界を掌中に把握できないことは、科学者がいちばん良く知っている」といった¹⁴⁾。また「酸素は燃焼をたすけ、水素は火にあえば激しく燃えるのに酸素と水素を化合させると水になるのはどうしてか」と問うた。

一方、アインシュタインが天才的閃きで発見した原子力開放が、人間に「原子爆弾」をつくらせ、いまだに人類に果てしらぬ核の恐怖をもたらしているのが事実である。また、ヒットラーが超人的な指導力のもとに、アウシュビッツでユダヤ人を大量虐殺したことも、悪魔的呪詛（のろい）によることであった。人は誰でも悪いことと知りながら、思いがけずに殺人でさえも侵すことがある。デモーニッシュ（悪魔的）と表現されるものは、やはり「やって来るもの」としかいえない。西田幾太郎は『善の研究』¹⁵⁾で、「神性」（はやりの言葉でいえば「宇宙意識」¹⁶⁾）とはどんなものか？を考えた。幾太郎のいう「神性」は仏教でいう「仏性」とおなじと見做してもよい。『善の研究—宗教の章』から抜き書きして著者なりに修飾すると「精神を支配するのは精神の法則である。それは更に大きい統一への要求であり理性の要求である。神性（宇宙意識）とは宇宙と地球のあらゆるものを統一する意識である。人間の精神を支配する統一の念、理性は神性の意識である。」という意味のことが述べられている。幾太郎は「善」を理性的に考えたのであって「悪」は無視した。そして、理想主義者であり、座禅に長年打ち込んだ幾太郎¹⁷⁾によれば「神性は哲学上の議論ではなくて心霊的経験の事実である」¹⁵⁾という。つまり「靈性（次回の主テーマ）」の経験に由来する。仏教では、不可知なものからやってくる真如（真の如し）をもたらすものを「如来」というが、本当は真如は善悪を超越したものでなければならない。

「大きい真実が私どもの内部の真実に送ってくるメッセージを受けたときのよろこびによって、自分のうちで無限の實在に触れるのである。」

—タゴール—

文 献

- 1) キャンベル：NHK放映「神話学」の第5回放映，1994. 1. 21
- 2) 高田真治，後藤基己：易経（33刷）．岩波文庫，岩波書店，東京，1993.
- 3) 中原英臣，佐川 峻：利己的遺伝子とは何か．Blue Backs，講談社，東京，1991.
- 4) 中川定明：ひとつのいのち(3)．川崎医会誌一般教，18，55，1992
- 5) D. チェンバレン：『誕生を記憶する子どもたち』．春秋社，東京，1991.
- 6) 春秋社編集部編：誕生の記憶，春秋社，東京，1992.
- 7) 小林 登，大島 清，中野仁雄：胎児の行動研究の意味するもの．日本医師会誌，107，1579-1595，1992.
- 8) 秋山さと子：ユングの心理学（22刷）．講談社現代新書，東京，1992.
- 9) 梅原 猛，藤村久和編：アイヌ学の夜明け．小学館，1994.
- 10) 知里幸恵訳：アイヌ神謡集（24刷）．岩波文庫，岩波書店，1994.
- 11) 小寺敏子：和訓黄帝内経素問：上古天真論篇1．東洋医学研究会，1988.
- 12) 服部正明，上山春平：仏教の思想(4)認識と超越〈唯識〉．角川書店，1970.
- 13) 河合隼雄：ユングの生涯，レグルス文庫（8刷）．第三文明社，東京，1992.
- 14) 高橋康雄：心に不思議あり—南方熊楠・人と思想．JICC（ジック）出版局，東京，1992.
- 15) 西田幾太郎：善の研究（39刷）．岩波文庫，岩波書店，東京，1970.
- 16) 河合隼雄，吉福伸逸編：宇宙意識への接近（12刷）．春秋社，東京，1993.
- 17) 上田 久：祖父 西田幾太郎（2刷）．南窓社，東京，1983.